在外日本美術カタログコレクション（附属図書館所蔵）

美術工芸資料館長　並木誠士

京都工芸繊維大学の前身校のひとつである京都高等工芸学校は、新しい世紀がはじまってまもない１９０２年に開校した。京都高等工芸学校では、19世紀末からフランスを中心にヨーロッパ全土で流行していた「アール・ヌーヴォー」の新しい芸術様式を京都の伝統産業界に伝えるために、フランスを中心に欧米各国から最先端の美術工芸品やデザイン資料、書籍類などを購入した。それらは、教材として図案科の授業を中心に活用された。さらに、京都高等工芸学校の使命のひとつが京都の工芸界の刷新にあったため、これら欧米の最先端の美術工芸品は学校を超えて活用されたことがわかっている。とくに初代校長の中澤岩太は、校内に「陳列所」をつくる構想を開校時からもっていて、その精神は現在の美術工芸資料館にも受け継がれている。京都高等工芸学校開校直前の１９０１年に結成された、中澤が会頭をつとめた関西美術会では、京都高等工芸学校が教材として購入したポスターや陶磁器などの美術工芸品類が参考品として展示されている。

明治政府は、美術工芸品を海外へ輸出して外貨を獲得することを大きな方針として掲げていたため、京都だけでなく、全国のさまざまな工芸産地で輸出用の工芸品が制作された。京都高等工芸学校における指導も、そのような輸出工芸の質的向上に向けられていた。そして、輸出された工芸品の多くは、彼の地で王侯貴族や富裕な人びとのコレクションに収まった。それらのコレクションは大切に保存されて、現在では海外の美術館・博物館における日本美術コレクションの中核を形成している。なかにはキャビネットのような大きな家具もあり、他にも宝石箱やキャンディーボックスに使われた、掌に乗るような小箱もある。どの作品も精密に、そして、華麗に装飾をされた工芸品だ。

しかし、そのように明治時代に各地で制作されて、海外に輸出された美術工芸品について、網羅的に調査・研究をするには、実際に現地に赴く必要があり、多くの時間を要することにもなり、なかなか難しいのが現状である。

２０２３年3月、附属図書館は２０８０冊に及ぶ図書の寄贈を受けた。いずれも、美術工芸、デザインの研究にとって重要な図書であるが、なかでも、日本の美術工芸の海外におけるコレクション関係の図書資料、とくにカタログ、図版類の充実は特筆すべき点である。陶磁器、漆器、七宝や木工品にいたるまで、明治期に日本から海外へ輸出された美術工芸品のなかで、現存するもののかなりの部分が含まれているのではないかと思えるほどの充実ぶりだ。これらは、京都高等工芸学校で教材として使用され、現在は本学の美術工芸資料館や附属図書館が収蔵する標本（美術工芸品）類や図書資料と合わせて活用することにより、19世紀から20世紀前半期の美術工芸の東西交流史を研究するうえで重要な蓄積となることは疑いがない。

この貴重な図書・カタログ類を収集したのは、２０２２年秋に病に倒れた元大阪市立美術館学芸員の土井久美子氏である。今回の寄贈は、土井氏のご主人である浅沼（土井）丈二様の深いご理解により実現した。まず、土井氏の研究の足跡を簡単に振り返っておこう。

土井氏は日本の漆工芸についての研究者として大阪市立美術館の学芸員となり数多くの展覧会の企画・運営を担当されてきた。とくに漆工芸作品の意匠面に着目した「日本・中国・朝鮮に見る16世紀の美術」（１９８８年）、「やまと絵の軌跡」（１９９４年）、「和の意匠　新たなモティーフ・大胆なデザイン」（１９９６年）などの展覧会は、土井氏の関心を示す展覧会として重要である。いずれも、日本文化の特質ともいえる文学と美術の密接な関係を具体的な作品を通じて示す展覧会であった。日本美術の特質をジャンル横断的に示したこれらの展覧会はユニークで充実した作品群から構成されており、たまたま同学年で専門分野も近かった筆者も多くを学び、また、展覧会評を書いたりもした。そして、これらの活動と並行して、土井氏のその後の研究の方向性を決定したのは、スイス人コレクターのカザール氏による日本を中心としたアジア各地の漆芸品の一大コレクションである「カザール・コレクション」が大阪市立美術館に寄贈されたことである。土井氏はこのコレクションについて精力的に調査をされ、展覧会および収蔵品カタログに成果を結実させていった。

土井氏はさらに、カザール・コレクションの調査・研究を通して工芸品の東西交流に関心を拡げる。その成果は、２００４年に大阪市立美術館の担当者として、東京国立博物館・名古屋市博物館と共催で「世紀の祭典　万国博覧会の美術　パリ・ウィーン・シカゴ万博に見る東西の名品」を企画・開催したことにあらわれている。学界においても近代美術研究の重要なテーマのひとつとして万国博覧会に対して関心が高まっており、また、２００５年の愛知万博に向けて社会的にも万国博覧会が注目されていた時期に開催された展覧会で、三会場で記録的な入館者数を数えた。この展覧会のカタログに掲載されている土井氏の論考は、今回の寄贈資料なくては書けなかったものである。

万国博覧会を調べ、さらに工芸研究の立場から東西の交流史を研究するために、世界各地の美術館・博物館に所蔵されている日本の美術工芸品のカタログを集めていたのだろう。また、今回寄贈を受けた図書のなかには、海外における日本美術研究に関するもの、美術工芸に限らない交流史、経済史関係の書籍も多く含まれている。いずれも現時点における最高水準の成果物であり、日本はもとより、アメリカ・フランス・ドイツ・イギリス・スペイン・イタリアなど各国の様相がわかるようになっている。土井氏の研究にこれらが活かされることがあれば、さらにスケールの大きな、もしかすると世界規模での展覧会企画が生まれたのかもしれないと考えると残念でならない。しかし、これらのカタログ・書籍類はこの分野をこれから研究する後進にとっては、まさに宝の山である。附属図書館でも、できるだけオープンにして活用してもらえるようにして、跡をつぐ研究者の出現を期待しつつ待つことにしたい。

病に侵されて、学芸員としての夢やスケールの大きな研究が志し半ばのまま世を去った土井氏の無念は想像に余りある。残された我々、そして、後進の研究者や学生たちがこれを活用することこそが、土井氏に対するせめてもの供養になるのではないだろうか。合掌。

図2　Porcelain for Palaces; The Fashion for Japan in Europe 1650-1750
1990年、イギリス

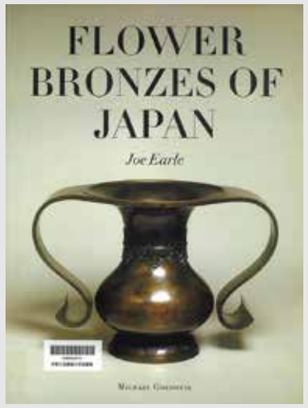

図1　Flower Bronzes of Japan
1995年、イギリス

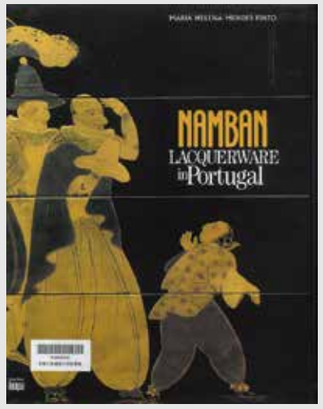

図4　NAMBAN, Lacquerware in Portugal,
The Portuguese presence in Japan (1543-1639)
1990年、ポルトガル

図3　日本の塗物 Lacche Giapponesi nel Museo Chiossone
1993年、イタリア